日本工業経済新聞　R5.3.8　（第三種郵便物認可）

宇管工　県央産技校生に実技指導

分水作業の流れを伝授

宇都宮市管工事業協同組合（中村勝理事長）は7日、平出工業団地の管工事会館で県立県央産業技術専門校の建築設備科1年生12人を対象に「水道本管からの分水作業講習会」を開催した。企業技能者が訓練生へ技術を伝授し、就業意欲の向上と設備業に携わる人材育成につなげるのが狙い。宇管工は青年部（福富昭部会長）の11人が実技指導を担当した。県央産技校への技術指導は昨年に続き2回目。

中村理事長は「現場で従事する若手技能者から技術を習い、技能や就業意欲を高めてほしい。半日掛かりで座学と実技指導を企画した。貴重な体験となるよう我々も精いっぱい努力する。せっかくの機会なので、不明な点は積極的に質問してほしい」とあいさつ。

黒川平教育技術委員会委員長は「人は1日当たり200～300リットルの水を使用する。送水パイプの中を圧力が掛かったまま水を蛇口まで引いていくのは手品のような技。分水は非常に重要な工程であり、興味を持って作業に臨んでほしい」と激励した。

星野祥史青年部理事が座学の講師を務め、水道本管から各家庭に分岐するバルブの取り扱い方法を説明。宇都宮の水道は1916年に通水を開始。市水道は法令の51項目を上回る71項目の水質検査を経て50万都市に安全安心な水を供給していると訴えた。

「サドル付き分水栓の取り付け工事」の動画を視聴後、訓練生は敷地内の実技会場で分水管の取り付け、穿孔、通水作業を体験した。建築設備科の1年生は19歳から26歳まで。普通高校出身者が多く、入学するまでは設備業に無関係な生活を送ってきた。

古沢和夫教授は「校内には分水作業を指導できる人材がおらず、マンツーマンで指導願えるのは貴重。将来像を描くのに参考になる」と話す。福富部会長は「卒業生2人が組合企業に入社した。若手が設備業に希望を持てるよう職場環境を整えたい」と応じた。

青年部から手ほどきを受ける建築設備科の訓練生